

—あおぞら—

雑感—PM_{2.5}と学問の場としての大学と—

東京農工大学大学院農学研究院
 島山史郎

北京を中心とする中国の諸都市やその周辺でPM_{2.5}の高濃度が報告されて大きな社会問題となってから早くも2年以上が過ぎた。2013年の1月に北京でPM_{2.5}が1,000 μg/m³にもなり、これが日本の環境基準の30倍近くの高濃度であると報道されて、大騒ぎになったあの事件である。テレビや新聞、週刊誌など大々的な報道合戦が行われたものであった。筆者のところへも、当時たまたまエアロゾル学会の会長を務めていたこともあって、多くの報道機関からの取材が殺到し、てんてこ舞いさせられたものであった。

そもそも、AIDSあたりから始まってO-157だのSARSだのとアルファベットで書かれる代物にはどうもうさんくさいものが多く、一般の方々も、これらと同様の危険なものが大陸で発生して日本に飛んでくるらしいという受け取り方をしたのしかたのないところではある。しかし、マスコミは時の日中間の政治的軋轢に便乗して、過大に報道していたさらいがあり、筆者も本人の意図とは裏腹にこれの片棒を担がされていた可能性があることは否定できない。深く反省はしているものの、ではどのように対処すべきだったかと考えると、なかなか簡単には答は出てこない。もちろんきわめて良心的な報道をしているメディアが大半であり、それらまでも排除することは得策ではない。そもそも取材する記者やレポーターの面々のほとんどが理科・科学といったものとは普段あまり縁がない人が多く、対象となっている現象の解説をする前に、より基本的なところから説明を始めないと分かってもらえないことも多々あった。そのため2~3時間も取材しながら画面に出るのは1~2秒というようなケースもままあった。ただ、自身の画面への登場は少なくとも、こちらの解説を記者やレポーターがしっかり咀嚼・消化・吸収して番組が進められたケースに遭うと、何となく救われた気がしたものである。

今年の1月にワークショップのため北京を訪れた際には、PM_{2.5}が200~300 μg/m³くらいであったが、現地の人たちは「今年は昨年一昨年よりだいぶ濃度が低いです」と言うような受け取り方で、日本の冬季のように多くの人がマスクをしているというような状況ではなかった。高い濃度のPM_{2.5}に慣れてしまい、あまり気にならなくなっているのだからだろうか。しかし、高濃度PM_{2.5}に長期間曝露されることはやはり健康へのリスクを高めるものであることは疑いようがない。慣れてしまって気にしないという時間が長くなること

は好ましくないのである。早く実質的な対策が打ち出されることを望むばかりである。

最近では我が国でもあまりPM_{2.5}に関する報道がなされなくなってきたが、たまたま本文執筆の1~2週間前に、北朝鮮における長期間にわたる大規模な山火事のニュースと、環境省が記者発表した平成25年度の大気汚染の状況における、夏場の国内発のPM_{2.5}に関するニュースに解説をする機会があった。やはり2~3時間の取材に画面への登場は2~3秒という状況だったが、ニュースの中の一般の人々の「PM_{2.5}って中国から来るものだと思っていた」という発言が大いに気になった。報道でセンセーショナルな部分だけが切り出され、繰り返して報道されることにより、間違った情報がインプットされてしまうということの好例であろう。我々学者たるものは公平かつ正確な発言を旨とすることは言うまでもない。しかし、発言の一部を切り出されて恣意的に使われるケースもないとは言えないので、難しい問題である。

話は変わるが、現在、大学における授業の英語化が進められようとしているやに聞く。グローバル化は確かに喫緊の課題ではあるが、学生の英語力を充分担保した上でないと、むしろ日本人学生の学力を低下させることにつながるのではないかと危惧している。中学・高校の英語教育を基本的に充実させてからでなくては、大学における授業の英語化は絵に描いた餅になりかねない気がする。我々が若い頃は、英語力に自信がなくてもポストドクで1~2年外国に行って、新しいことを学びつつ外国語で会話する自信をつけてくるパターンであった。現代ではそれでは間に合わなくなったと言うことなのであろう。また、日本の論文発表数は国民一人あたりになると、世界の中での順位を急速に下げていると聞く。大学の教員が研究以外のことに忙しすぎるのではないだろうか？ 上記の授業の英語化はこれに輪を掛けるのではないだろうか？ 国立の研究所から大学に異動した筆者の経験から言っても、大学の教員は精神的には足かせは少ないが、研究に向ける自由な時間は少ないように思われる。ともすると大学は教育の場であるとの狭い意見にとらわれがちであるが、教員が最先端の研究を進めていなければ、大学が過去の知識だけを教える場になってしまうのは否めない。大学の教員が自由な発想のもとに先端の研究を行い、その成果とその基となる基礎知識を教える場となることを願うものである。